2021/12/05
ヨハネの手紙第一　講解メッセージ②
『やみの中を歩むとは』Ⅰヨハネ 1:6-10

私たちは聖書を読むとき、自分の考えとは違うことに多々ぶつかります。そのようなとき、大切なことは、「自分はどう思うのか」ではなく、「聖書はどう教えているか」です。私たちは、聖書が教えていることを信じるために、自分の考え方から飛び出す必要があります。聖書のことばは信じる対象であって、理性の対象ではありません。大切なことは納得することではなく信じることです。そうでなければ、私たちはいつまでも自分の殻から飛び出すことができません。

特にヨハネの手紙は、「永遠のいのち」をテーマにしているため、世の中の考え方とは異なる場面が多々あります。どのような場面であっても、「聖書が教えているのだから信じる」という立場を取ることができれば幸いです。

■聖書が語る「やみ」とは

> 「もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」
>
> （Ⅰヨハネ 1:6-7）

「やみ」とは何を指しているのでしょうか。一般的には、「やみの中を歩む」とは罪・悪を行っていることだと考えがちです。その結果、救われたら行いが良くなるものであって、救われても以前と変わらない罪深い生活をしている人は、本当に救われてはいないなどと言われることもありました。果たしてそうなのでしょうか。それは、クリスチャンであることを行いによって証しできるのかという問題でもあります。

一般的にクリスチャンとは聖い生活をするものだと考えられており、クリスチャンになると様々な戒律を守らなければならないのだと誤解して、非常にハードルを高く感じる人が大勢います。それは、クリスチャンであっても同様で、多くの人が、私はクリスチャンになったのだから罪を犯してはいけない、聖い生活をしなくてはいけない、そうでなければ救われているとはいえないと思い込んでいます。しかし聖書は本当に、やみの中を歩むとは罪を犯し続けるということだと教えているのでしょうか。

「私たちの交わり」とは、「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」（Ⅰヨハネ 1:3）とあったとおり、神との交わりで

す。この手紙の著者であるヨハネが伝えているのは神の福音です。そのヨハネとの交わりは神との交わりです。つまり、やみの中を歩むとは、神との交わりを持たずに生きることです。

> 「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。」（Ⅰヨハネ 1:8）
> 「もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。」
> （Ⅰヨハネ 1:6）

この二つの御言葉を照らし合わせると、「真理を行っていない人」とは「『罪はない』と言う人」ということになります。つまり、「やみの中を歩む」とは、「自分は聖められたので罪を犯さなくなりました」という生き方だということです。

ですから、光の中を歩むとは、その逆で、罪に気づいてそれを神に言い表す生き方ということになります。私たちはクリスチャンになったから罪を犯さなくなるのではありません。クリスチャンになったから罪に気づいて、それを言い表すようになるのです。光によって罪が明らかになったら、神様にいやしてもらえばいいのです。それは、私たちが光の中に入ったからです。光の中に入って生きるとは、罪を犯さなくなるということではないのです。これが多くの人が誤解をしているところです。

■やみの中を歩むとは

１．自らを義人とする生き方

やみの中を歩むとは、自らの行いで自分の正しさを表そうとする生き方のことです。これは、私たちのこれまでの生き方です。この世では、良い行いによって自分は良い人間だということを示そうとします。しかし、クリスチャンになったらその誘惑に負けないようにと聖書は教えているのです。それは、異邦人が目指す生き方であって、やみの生き方です。

聖書の時代、このような生き方の頂点にいたのがパリサイ人です。彼らの行いは確かに立派で人々から尊敬を受けていましたし、彼ら自身も自分たちは義人だと思っていました。しかし、イエス様はそのような彼らの生き方と戦われたのです。彼らの生き方こそやみの中を歩む生き方だからです。

２．よく思われようとする生き方

やみとは死を指します。死とは神と分離された状態です。悪魔に操られた蛇を通してアダムに死が入り込んだとたん、アダムは神が見えなくなり、自分が見えなくなりました。自分の内側におられる神が見えなくなり、神に愛されている自分も見えなくなってしまったのです。それ以来ずっと人は不安の中に生きています。これがやみです。アダムとエバは、神が見えなくなったとたん、いちじくの葉で腰の覆いを作り、自分たちのうわべを良くしようと

しました。さらにそれだけでは足りず、彼らは隠れました。権威のもとに隠れて自分を良く見せようとしたのです。今日の私たちの生き方と全く同じです。しかし彼らはそのことに耐えられず、神の呼びかけに応答し、ようやく神の前に姿を現します。これが救われたということです。

では救われたら彼らの生き方が変わったかというと、全然変わりません。彼らは神から罪を指摘され、アダムはエバのせいに、エバは蛇のせいにしました。つまり、自分は悪くない、自分は罪人ではないと公言したのです。これが良く思われようとする生き方の起源です。この時から私たちはやみの中を歩み始めてしまったのです。

やみとは不安です。人はその不安から逃れようとして愛される自分を目指して生きています。これがやみの中を歩むということです。私たちはもうそのような生き方をする必要はありません。

３．人を裁く生き方

自分の正しさを証明するのに一番手っ取り早い方法は人を裁くということです。人を裁けば自分は正しいという証明になります。こうして私たちは互いに裁き合い、「自分は正しい」という生き方をするようになりました。しかし聖書は**「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。」**（Ⅰヨハネ 1:8）と教えます。イエス様は、繰り替えし、「人を裁くな」と言われました。

やみの中を歩むとは、罪を犯さなくなることではありません。私たちの中に入り込んだ死によって、私たちはどうしても罪を犯してしまいます。それを認めずに、「私に罪はない」と言うことがやみの中を歩むということなのです。

■光の中を歩むとは

> 「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。 もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」（Ⅰヨハネ 1:9-10）

１．神の前で罪を言い表す

光の中を歩むとは、罪を犯さない生き方ではなく、罪を言い表す生き方のことです。私たちが自分の罪を認めることができるように、聖書は大変厳しい基準を設けています。心の中で思うだけでも罪である、心の中で怒りを覚えるだけで殺人を犯したのと同じことなのだと。このようにしてすべての人を罪の下に閉じ込めたのです。それは、神の恵みによってしか贖いはないことを教えるためです。

ですから、クリスチャンになるとは聖く正しい生き方をすることではなく、正直に生きていけるということです。その理由は、私たちはすでに永遠のいのちを持っているからです。

永遠のいのちを持っているということは、将来が保障されているということです。

私たちがイエス・キリストを信じることができるようになったのは、朽ちることのない霊のからだを着せられているからです。イエス・キリストを信じたから救われたのではありません。神に捉えられたからイエス・キリストを信じることができるようになったのです。誰も自分の力で神を信じることができるようにはなりません。神に捉えられない限り、信じられるようにはならないのです。つまり、救われなければ信じることができるようにはなりません。ですから、信じているあなたがたはすでに救われていると言えるのです。

私たちは潜在意識の中で神に応答し神に捉えられ、霊のからだを着せられて永遠のいのちを持つようになりました。それによって、イエス・キリストを知るようになり、父なる神を知るようになったのです。そして、イエス・キリストについての御言葉を聞くことで信仰が育ち、信仰を告白して救いを自覚できるようになったのです。

一度永遠のいのちを受けた者は、決して滅びることはありません。誰も私たちを神の愛から引き離すことはできないのです。私たちに訪れる肉体の死すら、神の愛から私たちを引き離せません。このように私たちはもう安全地帯に入っているのですから、安心して正直に自分の罪を見つめて自分の罪を言い表せばよいのです。

２．罪の赦しを受け取る

私たちは自分の罪に自ら罰を課して、何か良いことをしないと罪が赦されないと信じ込んでいます。しかし、そうではありません。罪は無条件で赦されるものです。ですから、赦されたことを受け取るだけでよいのです。このことを教えるために、イエス様は放蕩息子のたとえ話をなさいました。

また、多くの人は、罪を反省し悔い改めれば赦されると思っています。つまり、反省すれば赦されるということです。しかし、聖書は一度たりともそのように教えたことはありません。罪を悔いるからではなく、神のもとに行くから赦されるのです。

これはそもそも「メタノエオー」という言葉を「悔いる」と訳したところから生じている誤解です。「メタノエオー」は本来「向きを変える」という意味のことばです。「悔いる」には別のギリシャ語があります。この訳語の問題点を最初に指摘したのはルターで、今も多くの人が問題視しています。

神は条件をつけません。悔い改めたら赦すのではなく、赦しを受け取ればいいと言っておられるだけなのです。本当にありがたい話で、この世の価値基準では到底信じられないのも無理はありません。

罪の赦しを受け取るということは神のいやしを受け取るということです。神にとって罪は病気です。私たちはただ病気をいやしていただけばよいのです。

なぜこのことが重要なのかというと、罪のいやしを受け取ることだけが、神への愛を創造するからです。私たちの知識や行いは、神への愛を生み出すことはできません。神を愛する心は、罪が無条件で赦されることで初めて生まれるのです。ですから、多くの罪が赦されれば赦されるほど神への愛は増し加わるのです。神が目指しているのはまさしくこれです。

私たちが心から神を愛せるようになること、それが私たちの平安になるからです。それに

は神様から多大の愛を受け取るしかありません。つまり、無条件の愛を受け取ればいいのです。

イエス様があるパリサイ人にこのように尋ねられたことがあります。「ある金貸しが、一人には500デナリ、もう一人には50デナリを貸していたが、二人とも返すことが出来なかったので、二人とも赦してやった。この二人のうち、どちらがよけいに金貸しを愛するようになるか。」パリサイ人が、「よけいに赦してもらったほうだと思います」と答えると、イエス様は、「その通りだ」と言われました。

このように、多く赦された者は多く愛するようになるのです。そして、神はとにかく私たちの神を愛する心を育てたいと思っています。神を愛する心が育てば、人を愛することができるようになります。本当に自分の罪が赦されたことに気づくと、人の罪を裁かなくなります。カギは、罪の赦しを受け取ることです。これが光の中を歩む道です。

３．悪からきよめられる

悪からきよめられる生き方とは、神を愛する生き方です。私たちの中に神への愛が創造されると神を愛する生き方に変わります。これが光の中を歩むということです。

「神を愛したい、神のために何かしたい」そう願うとき、私たちはまた心から罪を言い表したくなります。罪を悔い改めるから赦されるのではなく、赦されたから罪を言い表したくなるのです。赦されるから神様への感謝が生まれてくるのです。

■神への愛を創造する

このように、やみの中を歩むとは自分を正しいとする生き方であり、光の中を歩むとは罪を言い表し神の赦しを受け取る生き方です。これによって神への愛が創造されるのです。

ヨハネがこれらのことを語るのは、ヨハネが直接イエス様からこのことを教えられたからです。

> 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（ルカ 18:10-14）

パリサイ人とは行いに優れた人たちのことです。それに対して取税人は罪人の代名詞です。しかし、イエス様はこのパリサイ人をやみの中を歩む人の代表となさいました。自分の行い

で自分を義とする人、それがやみの中を歩む人です。

それに対して取税人は、『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください』と祈りました。これが、光の中を歩む生き方なのです。自分の罪に気づいて神に助けを求めて罪の赦しを受け取る生き方です。なぜか。それは神への愛が創造されるからです。

パリサイ人は、神の助けを乞わず、神の憐れみを受け取らず、神の恵みを受け取りませんでした。ただ自分を誇るだけです。これでは神への愛は創造されません。これが問題なのです。

悪事を働かず神の前に忠実な行いをもって生きているパリサイ人の姿は、現代の敬虔なクリスチャンのイメージでもあります。私たちは知らず知らずのうちにやみの中を歩んでいないでしょうか。私たちは光の中に入ったのですから、光の中を生きていきましょう。光は罪を照らし出します。その罪を差し出し、赦しを受け取り癒され、こんな私でも愛されていると気づけばよいのです。そうすれば、あなたは心から神を愛するようになっていきます。そのことが私たちに平安を与え、安息をもたらすのです。これが、神が目指す癒しです。

さて、このパリサイ人と取税人のたとえが、現実になった出来事があります。あるパリサイ人の家でイエス様が食事をしておられると、一人の罪深い女性が自分の涙と髪の毛でイエス様の足を洗い、香油を塗ったのです。（ルカ 7 章）そのパリサイ人は、心の中で「この女は罪深い女なのに」とさばきましたが、この時イエス様は、先述の借金が赦された人のたとえ話をなさったのです。そして、さらに次のように言われました。

> 「そしてその女のほうを向いて、シモンに言われた。「この女を見ましたか。わたしがこの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。あなたは、口づけしてくれなかったが、この女は、わたしが入って来たときから足に口づけしてやめませんでした。あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかったが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。」そして女に、「あなたの罪は赦されています」と言われた。」（ルカ 7:44-48）

イエス様ははっきりと「この女性はあなたがたよりも私を愛してくれた」と言っておられます。その理由は、彼女の多くの罪が赦されていたからです。イエス様にとって、彼らとこの女性との違いはこの点だけです。彼らは罪が赦された経験をしていませんでした。だから、食事でもてなすことはできても愛することはできなかったのです。

神への愛を創造する力は、多くの罪が赦されることによって生まれます。光の中を歩むとは、赦されていけばよいということです。そのために神様は、人にはできない律法をお与えになっているのです。それは、そのことを通して私たちが自分の罪に気づき、神の赦しを受け取るためです。こうして神への感謝が生まれ、私たちの心はいやされるのです。

これが、神が私たちに望んでおられることです。神を愛するとは行いですることではなく、神の赦しを受け取ることで達成するものなのです。